

橋本匠『ひらがな・仮』

木村 晶彦（きむら あきひこ）

導入部。解説プログラムに記された、演者の祖母と思しき人物の声が聞こえる。祖母の手引きで、演者が筆写を教わっている。その様子を録音し、音源として使用したのだ。演者は時にそれに合わせ、時にそれから外れて勝手に踊り出す。

声だけで示される情報には、活字と違って形がない。「ああしなさい、こうしなさい」というアドバイス。しかしそのアドバイスが持つ情報量は、目に見える形がない分かえって多い。より正確には、目に見えないから情報量が多いと感じる。

筆写しているその歌は、誰その和歌の一節か。プログラムには紀貫之の『高野切古今集』とある。古文の授業と百人一首で身につけた以外、こちらには知識の持ち合わせがない。よって想像をする他はない。昔習った記憶を辿り、「どうやらあの歌に違いない」と当たりをつける他はない。

そうこうして想像力を駆使するうち、声が表示指示内容ではなく、声の持ち主に引き寄せられてしまっていた。私のような若輩者にとり、その声は人生の先達からの声である。一芸を極めた書道の師からの声である。書家の気概に職人の矜持を帯びた声。伸びた背筋が脛の裏にありありと浮かぶ。どのような音楽をもってしても替えが利かない「音楽」だ。

小学3年から4年にかけての2年間。私はお習字に通っていた。思い出した。津田先生だ。お稽古が終わると、カンロ飴と黒飴を一つずつくれた。年寄りくささが恥ずかしかった。飴もそれほど好きではなかった。でも帰ったら舐めていた。30年近くも前のこと。

お習字には約束事が多い。自由が利かない。ここでトメ、ここでハネ、ここでハライ。固定された型があり、離れることを許してくれない。墨汁のにおいが立ち込める、狭苦しい習字教室。10歳にもならぬ私には、窮屈で仕方がなかった。

毛筆が苦手だった私にも、気持ちよかったことがある。それはひらがなで「の」や「ま」を書いてみる時。「の」は一画、「ま」は三画目。最後の仕上げで、完成に向かって筆を回すあの瞬間。きれいに筆が回ったときの気持ちよさ。あれは何物にも代えがたい。

演者の橋本は、この「の」の字を表現するとき、ほとんど必ず前転をする。会場が沸き、笑いも起きた前転だ。あの「の」の字前転が、私にすべてを思い出させた。すっかり忘れかけていた私の2年間。演者のダンスが思い出させた2年間。

私を感じたのと同じ気持ちよさを、演者も感じたのではないか。先生でもある祖母の手ほどき。見様見真似で字を写す。堅苦しさが続く中、息の抜ける瞬間があるとすれば、やはり「の」の字の筆写であろう。

そこには、型から解き放たれた快樂があり、型に嵌ってみることへの快樂もある。「の」の字をきれいに書き記すには、型を体で覚えねばならない。体で覚えて表現せねばならないのだ。ぎこちないお習字が、流麗な草書体へと至る過程。書道の奥義はダンスの奥義か。

パフォーマンスの後半。音源の主の声は消え、導かれる声を失い、演者の一人旅となる。けれども演者の意識としては、さほど孤独に打ちひしがれはしなかったろう。祖母と一緒に作った流れに、身を任せればよいのだから。

「ひらがなが発明された瞬間を表現するには、即興でやるしかない」とは演者の言葉だ。私もそれに同意する。文字がこの世に生を受けたその瞬間、発明者には衝動があった。この感情を形にして、受け渡したいという衝動があった。初めに衝動ありき。

文字を書くという行為は、高度に知的な行為であるとされている。さてそれはどうだろう。文字は手で書くものだ。手は書きながら、文字のリズムを手で感じる。手で感じた文字のリズムは、頭の先から足の先まで行き渡る。波のように伝播していく。

そして体に伝わった文字のリズムは、今度は手のほうに返ってきて、また手から全身へと返る。寄せては返し、寄せては返す、波のよう。そういえばダンスの後半で、演者が切れ切れに口から発した、言葉とも呼べぬ言葉の中に、「なーみー」という音の羅列があった。より正確には、思い返して後から気づいた。

偶然の一致にしては、できすぎてはいないだろうか。体が言葉の波を感じた。体を伝った言葉の波は、「なみ」という言の葉となり、思わず口をついて出た。「な」と「み」が一つになって、「なみ」が生まれた瞬間も、このようなものではなかったか。

波及効果が呼び起こした時間の感覚。30年前の習字教室どころではない。太古の昔が数瞬見えた。摩訶不思議なタイムトラベルに立ち会えて、評者としても光栄である。